

メールレター（63）

夏かしら？梅雨かしら？

日本の梅雨を引っ張ってきてしまったかのように雨の降る日が続いた6月も終わりに近づいてきました。いつもなら、緑が美しく花が咲き乱れる美しい時期なのですが、今年は、ただ、しとしと。。と雨が窓をたたき人出もまばらなまま、ぐずついた季節が過ぎていきました。

6月24日はケベック州祝日、7月1日はカナダの祝日と1週間を挟んで祝日があるため、これに合わせて休暇をとって10日間ほどバカンスに出かける人がケベックには多い時期です。義理の長男は、元プロテニスプレーヤーの嫁とプロテニスプレーヤーを目指す二人の義理の息子連れ、ウィンブルトンテニス大会を見にロンドンへ旅立ち、娘はオタワの義実家のシャレーに出かけていきました。ドリトル先生とマダム田中は不動です。

というわけで、ドリトル先生は義理の長男に頼まれて猫を預かることになりました。

「あ、そうそう、ミニ亀もつれていくから。」

義理の長男は更に余計な物もつれてくるようです。

「私は自分の健康管理で精いっぱいだから、猫の面倒は無理かも。」

マダム田中は躊躇しました。

「トイレも餌も僕が全部するから大丈夫。」

ドリトル先生は太鼓判を押したのですが、計画性のないドリトル先生と計画性のない義理の長男が計画を立てたため、最初から実に面倒なことになりました。夕方飛行機に乗ることになっている日の午前に、ドリトル先生が仕事先から、ぶんぶん怒りながら突然帰ってきたのです。

「仕事を何もかも放りだしてきたんだ。これから猫を連れてくるって言うんだ。何様だと思っているんだあいつは。何もかもでたらめだ。」

「そう言われても。日にちとか時間とか打ち合わせておかなかったの？」

「僕がすることじゃないだろう。あいつが連絡してくるべきなんだ。」

「そう言っておかなければ、あのでたらめなマイペースな人のことだから無理かも。」

そういう暇もなく、ドアのノックの音が聞こえ、

「パパこんにちは。ほら、猫だよ、トイレはこれ、餌はこれ。ミニ亀は水槽に入れておくから、今もって来るから待ってて。いろいろとありがとう。本当に助かる。」

ニコニコと、父親の怒りなど知る由もなく、あっけらかんとした義理の長男が顔を出したのです。人の迷惑などこれっぽちもわからない、能天気なマイペースの長男は、

「すぐ帰るから。車のタイヤがパンクしているみたいなんだ。何とか家までたどり着かないといけないし。飛行機に乗らなくちゃいけないから。じゃあね、よろしく。和子も元気そうで良かった。」

嵐が通り過ぎ、猫とミニ亀が残されたのでした。

「なんだあいつは、いったい。僕も仕事に戻るから、後は宜しく。」

僕が面倒をみるといったあの言葉はどこにいったのでしょうか。こんなことだろうとは思いましたが。こうしてレンタル猫は、猫バカンスを過ごしに我が家にやってきました。ドリトル先生には目もくれずマダム田中の後をついて回る日々が始まりました。一体いつ引き取りに来るのかそれも定かではありません。

マダム田中の健康状態は少しずつ回復しつつあります。天使のサンドラのリハビリ指導のエクササイズの結果が見えてきました。手術をした膝とその周りの筋肉に注意を払いながらの地道なエクササイズが新しい筋肉を作り上げています。骨折して固定されていた肩の筋肉がほぐれ、腕や肩が動くようになりつつあります。太ももは筋肉で少し太くなりました（脂肪でないと良いのですが）。歩く時に足腰が強くなってきたのを感じます。毎朝、家の周りを杖をつきながら、15－20分ほど散歩もするようになりました。家の中と外では足の踏む強さも違うので、少しずつ慣れていかないといけないと思い、朝、人のいない時間にコツコツと杖の音を立てながら歩いております。

先週、第二回目の担当医との外来面会がありました。待つこと4時間。面会10分。指定された時間より30分も早くついたので、

「レントゲンを先にとってください。」

と看護婦にいわれ、レントゲンの待合室でジャケットに着替えて待つこと1時間半。レントゲンはたったの15分。

「待ち時間とレントゲンを撮る時間とのバランスが実に悪いんですね。1時間半待って、レントゲンはたったの15分とは」

「すみません。今日はレントゲン患者が多くて。」

レントゲン技師は一応謝ってはいましたが、レントゲンを撮るから早く来るように連絡をしてくれても良さそうなのにと不満が募るばかりでした。レントゲン撮影を終え、場所を変え、外来面会の待合室で待つこと2時間。外来面会の受付に何度か打診しても、マダム田中の順番の知らせはなく、4時半になると受付はぴったつとしまってしまったのです。

「ちょっと待って。私の番はどうなっているの？」

「大丈夫です。患者の面会リストにはのっていますから。そのうち呼びにきます。」

そう言うと受付は姿を消して帰ってしまったのです。待合室にひとけはなくなり、がらんどうです。全員4時半で帰宅なのです。

マダム田中は、診療室につながる廊下のドアを、痛い脚でひとけりすると、あちこち探して、担当医の診療室のドアをたたいたのです。

「そろそろ私の番でしょうか。」

「そうそう次です、この人の次。」

こうしてやっと回ってきたマダム田中の診療の番。

「ドクターお元気ですか。」

若いのですが、腕は良い有名な外科医なようです。

「貴女もお元気ですか。具合は良さそうですね。どれどれ膝の手術の傷は？」

マダム田中の脚を手にとり膝を眺めると

「素晴らしい手術だ。綺麗な完璧な手術だ。素晴らしい傷口だ。」

「でも、膝の周りの感覚がまだ戻らない所があります。肩は痛いし。」

「感覚はそのうち戻るでしょう。もっともここには神経が通っているから、最悪戻らないところもあります。肩の具合どうですか。後ろに手をまわしてみ。ちょっとまだ固いようですね。ちょっと立ってみてください。」

マダム田中はすっと立ちあがり、

「腕を上げてみて。」

すっと腕を上げました。

「素晴らしい回復です。」

その日の朝、天使のサンドラのリハビリを受けたばかりなので、膝も肩も十分良い状態になっていたようです。

「そうそう、君の年も考えると大したものだと思うよ。」

ドリトル先生が一言加えました。

「そうそう、本当に。」

ドクターも大いに同意するのです。

「ドクター、でも、腕が十分伸びないんです。肩の筋肉が固まっていて痛いし、これでは主人の顔に往復の平手打ちびんたができません。」

外科医はクスッと笑うと。

「それは、大事なことも。リハビリを今まで通り続けていけば、多分回復すると思います。2-3か月待ってみてまだ治らない場合はコーチゾンの注射をしてみましょう。では、また外来面会の連絡をします。」

そうなのです。外科医は急いで帰宅しなくてはいけないのです。家族が待っているのかもしれませんが。子供のピックアップがあるかもしれませんが。お料理をしなくてはいけないのかもしれませんが。4時半を過ぎたら、患者などどうでも良いのです。結局、あれほど待って撮った膝と肩のレントゲンは一切みることなく、外来はたった10分で終わってしまいました。ドアをひとけりして診療室に押し込まなければ、マダム田中の外来面会は忘れられてしまっていたかもしれません。マダム田中は、何の進歩もない外来面会に怒り心頭に達し、疲れ果て、帰宅と途につきました。

